

## 十五歳の兵隊さん

新井 輝夫（昭和4年生まれ）

「若鷺の歌」、あのせつなく悲しき哀愁を帯びた歌、今でも私は時折、宴席で茶興によく歌うのである。

昭和19年6月1日付で予科練発祥の地、土浦海軍航空隊に入隊した。満15歳3か月である。今の高校1年の1学期中頃にあたる。村中の小中学生、村民の歓呼の声で村境まで見送られたのが目の前にありありと浮かんでくる。車窓から身を半分以上も乗り出して別れを惜しんだのも、つい先頃の事のように考えられる。

今でも私が大事に保存している当時の記念品が二つある。一つは私が胸に十字にかけた日の丸の国旗一枚には「大日本は神国也。」「忠誠一丸」と故相馬御風先生が肉筆で署名されたもので当時私が一人で直接お願いに上がって書いて戴いた旗。今思えば大変勇気があったと我ながら感心する。

ほかの一枚は「皇威輝八紘」と糸魚川中学校長と、恩師、同級生の寄せ書きの旗である。私はこの二枚の国旗を予科練の記念として家宝として永久に保存したいと考えている。

ともかく集合地点の高田までは母と叔父が見送ってくれたが、列車の窓から見えなくなるまで母の姿をじっと見つめ、これで二度と会えなくなるのかと思うと涙さえ出なかった。只私は「母よ、いつまでもお元気であれ。」と心の中で祈って別れを惜しんだ。（父已に1歳時に死亡している。）

以来1年3か月、終戦で20年9月復員するまでの間、母の姿を見たのは二度あったきりである。一回目はほんの数秒間、東京爆撃のB29の大編隊の空襲警報で、隊外の防空壕に避難し、解除になって帰隊する時、整列して駆け足で隊門までくると、母と日立の叔父が立っていた。「あっ、お母さん。」「輝夫！」と互いに心の中で呼びあって二人の前を駆けながら顔を見合っただけの事。母たちは面会の許可を願い出たが許されず土浦に一泊しただけで無念にも帰られたと聞く。私も密かに後から面会できるものと期待していたが、その気配なく諦めてしまった。

今一回は正式に隊内で面会が許可になった日のこと。2時間程度に限られた面会だったと記憶している。私が一年三か月間に、母とゆっくり話し合えたのはこれが初めてであり、只一回きりの事であった。その日は20年の2月、あの大雪のときであった。2階屋根裏から出入りしなければならぬ豪雪の時であった。私共が陸戦特攻隊として出撃する為に最初で最後の家族との面会、別離の時を与えてくれたのである。

約8か月ぶりの母に会え、物資の不足にもかかわらず、隊では味わう事の出来ない数々のご馳走を重箱に詰めてこられ、それをむさぼり食べる私の姿を、母はどんな心境で眺められておられたのだろう。私は隊での苦しみも母に心配かけると思い、あまり口には出さず家族の様子や郷里の友達の事、出征後の生活の変化等について話し合った。

面会の時間はまたたく間に過ぎ、全員庁舎前から隊門前まで並んで「帽振れ！」の号令で夫々

帽子を振って家族との別れを惜しんだ。どの母親も後ろをふり返りつつ別れていったが、ある母親は息子の体に泣きついて離れようとしなかった。いかに銃後の母は強しといえども本当に心の苦しみをぶちまけて話し合ったらどの母親もこのような胸中になったであろう。

その後、3月に入り、青森県三沢航空隊に約半数程転隊となり、私もその一人となった。すでに六か月で飛行兵長となり、入隊当初ほどの苦痛はなかったが、土浦航空隊8か月の訓練は筆舌に表せない苦闘の連続であった。15歳から19歳迄の少年を僅か半年で一人前の帝国海軍人に仕上げようとするためだから、それこそスパルタ教育の厳しい特攻訓練であった。

朝の「総員起し。5分前」から始まり、起床ラッパと共に起き就寝ラッパから巡検後の説教の終わるまで睡眠時間以外は終始気の休む暇もない日程だった。

軍人精神注入棒のバツタの海軍式制裁は今尚忘れられない。

8月15日終戦、佐官以上の責任者の中にその日の中に自決された方もあったと聞く。

8月17日頃、予科練先輩の特攻隊生存者の中に「戦いはこれからだ。日本人が地球上から抹殺されるより、一億玉砕するまで戦おう。」というピラを撒き散らした者もあった。

終戦後も武装解除の仕事をし、連合軍が上陸する迄、志願兵は除隊するか戦犯に問われるかのデマがとんだが9月1日復員できた。